911.168
Ko274
911.168-Ko274ウ
1200500755624

始

911.168
Ko·274

小日山直一登

小日山直登寄贈本

910
356

この歌集を與謝野寛先生の
み靈のまへにささげまつる

物開工天

「くろがね」の初めに

くろがねはいづくにあるぞ土の中若しく
は人の眞心の中

しろがねも黄金も玉も如ぬなりくろがね
の質やや粗けれど

鞍山に大鎔鑛爐成りぬとて天を拜しぬく
ろがねの爲め

鞍山の大鎔鑛爐守りし人否くろがねをま
もりたる君

鐵(くろがね)もはがねも歌も成り出づる大鎔鑛爐君
が築きし

鎔鑛爐くろがねの灯をかたへにし國を祈
りし益良雄の君

くろがねを何にたとへん云ふべくは人の
中なる會津魂

幾度か君見に行きぬ蒙古なる興安の嶺黑
龍の江

鞍山や康德の朝築かれし大鎔鑛爐とこしへならん

くろがねよ興安嶺の白樺の林に寢ねて思ひしもこれ

與謝野晶子

歌集 くろがね

目次

裝幀……小杉放庵畫伯
序歌……與謝野晶子先生
尊皇篇……一
宮城を仰ぎて……三
神宮に詣でて……二

秩父宮殿下を迎へたてまつりて……一二
高松宮殿下を迎へたてまつりて……一八
聖駕を迎ふ……二一
滿洲の國都成る……二六
皇紀二千六百年の春……二八
鐵鋼篇……三一
くろがねの歌……三三
滿蒙の資源を探りて……三五
鐵路頌……七九
壺蘆島行……八三
北票炭礦を視る……八六
景觀篇……八九
春……九一
夏……一〇五
秋……一一四
冬……一二四
羈旅篇……一三三
赴任の途上……一三五
雲に飛ぶ……一三九

北信遊草……一五三
伊豆遊草……一六〇
須雲川のほとり……一六九
杖頭抄……一七四
閒吟篇……一八九
聖戰……一九一
世に疇る……一九五
閒想……一九七
母と語る……二〇四
父として……二〇八

母病む……二一一
挽歌……二一四
想望……二一〇
子の嫁ぐ……二一三
寄款……二一四
漁村の曉……二一六
辭任……二一八
雜吟……二一一
詩集……二一五
亞細亞の黎明……二一七

移民頌……二五〇
くろがねの歌……二五三
製鋼所昭和の歌……二五五
遙かに母校を憶ふ……二五九
寄青年賦詠……二六〇
鞍山低唱……二六六
跋文……著者……一

昭和製鋼所時代の著者

尊皇篇

宮城を仰ぎて

おほ宮を仰ぐやまとのみたみわれ神くだ

ります御殿(みあらか)として

ゆたかにも松たかく立ち神さびぬわが天(あめ)

皇(すめら)の宮居の森は

富士の山しろきを望み宮柱ふとしく立て
りおほ君の城

仰ぎ見る鴟尾かみさびてすめらぎの宮居
たかかり青空のもと

おほみ石垣くづるれば天地の則にしたが
ひ伸ぶる若草

君王の城うち光りひとひらの雲うつりゆ
く三月の天

芽の萠えし柳の枝のながくたれ宮居の堀
の水青きころ

おほ君の城の松が枝うへに垂れ五月の水
の青き堀かな

あさ霞たつや五月の水あをく繞れる宮居
ときはぎの森

皐月照りわか葉のもゆる二條城いつくし
きかな仰ぎ見る時

仰ぎ見るわがおほ君の城たかし初夏光り
松青くして

壁しろく大城のやぐら鴟尾たかく雨に煙
れり松を凌ぎて

みゆき待ち人うちつどふ大路にてわれも
をろがむ尊きおん影

松の枝おもく垂れたる草はらに蒲公英さ
けりうす黄に白に

鳳輦のしづかに行きぬ天皇の大城に架る

高橋の上

めでたけれ青葉の色もおほ君のいませる

宮の森と思へば

あさみどり宮居の堀にすむ鳥の翼ほすな

り廣き芝原

宮城ををろがむ民の心こそわれは頼まめ

艦より機より

昏迷の世なれど天つ日の神のおほ稜威負

ひ立つ國と民

國亂れ世の改まる日もあらん天つ日嗣は

さあれ永遠

祝(ほこ)とりて護るのみかは心さへほとりにさ
さぐ日の神の城

神宮に詣でて

神苑の森のこみちに初春の梢はるけく仰
ぐおほぞら

代代木原かみ鎮(しづ)ませるすめらぎにぬかづ
きまつること初めかな

秩父宮殿下を迎へたてまつりて

昭和十三年六月三日秩父宮雍仁親王殿下鞍山昭和製鋼所に台臨遊ばさる、吾れその社の長として御迎へまうしあげつる折に詠める

畏みて迎ふる宮のみ車に青葉をわたる涼風ぞふく

友邦にわが皇子(みこ)むかへ工場もやまと男の子の氣宇にみなぎる

み軍(いくさ)に從ひまつるここちして宮を迎へぬ工人たちは

賜はりしみことばゆゑに畏みてなし遂げんとしわが誓ふこと

わが皇子の左に侍してわれもある車ゆく
なり高き爐のもと

くろがねの鎔けてたぎればわが皇子の歩
ますほとりうすら紅

平爐より鎔鋼たぎり落つるとき御眼鏡さ
さぐ宮の御手に

かしこみてあないしまつるわが皇子を飛
ぶ鐵の火花ちかくに

千斤の重きを荷負ふここちしてあないし
まつる宮の來ませば

わが皇子のみことば消しぬ壓延の機の音
たかく火花ちるとき

野人われ齋をぞ賜ふ皇子いますおんまへ
近し花をへだてて

わが皇子を仰ぐやまとのみたみわれこと
わりもなく涙こぼるる

賜はりしみ言かしこみ滿人もひとつ心に
業とげしめん

その翌日奉天飛行場より御上京遊ばさるる折に

滑走し機は地を離れ乘りたまふ宮をおほ
空たかく仰げり

高松宮殿下を迎へたてまつりて

昭和十五年六月六日高松宮宣仁親王殿下鞍山なる昭和製鋼所に台臨遊ばされし折に詠めるる

み車にめされんとする皇子の背にかしこくも降る滿洲の雨

灼熱の鋼壓延の機より出で火花ちるなり
皇子のおんまへ

われ半歩みこよりさきに退きぬ鋼壓延の機を走る時

越えて六月十二日新京なる關東軍司令官邸に召されて餐を賜へる折

賜餐はて皇子をかこみて吾れも侍し夕月
たかく御座を照す

聖駕を迎ふ

昭和十三年六月二十五日滿洲國皇帝陛下鞍山なる昭和製鋼所に御巡狩遊ばされし折に詠める

しろしめす國みどりして行幸まつ工場の
人陣にあるごと

雲ながれ半夏の空に風かをりみゆきまつ
なり高き爐のもと

模型室電氣釦におん手ふれほほゑまする
り若き皇帝

いりがねの業はた一如日滿とまうせば帝
うなづきたまふ

おん時閉せまれど若きおほみかどおん眼
はなたず鋼のたぎるに

灼熱の鋼塊をうつ機の響とどろくなかに
玉歩の移る

渡りますあら木の板の道ちかき爐の熱た
かし炎あがりて

灼熱の鋼塊をどる壓延の機のもとにして
玉歩とどまる

灼熱のあらがね燃えて龍顔を玉のみ汗の
つたふかしこさ

賜はりしみことばにありあなかしこ工業
國をたてよとの文字

十五年われ友としてあひゆるす張氏老い
たり御列の中に（張氏とは侍從武官長張海鵬なり）

滿洲の國都成る

友邦の帝をほぐと日のみ旗たかくかかぐる萬壽節かな

國都成り若き帝の臨御まち五族の民の集ふ秋かな

はかりごと全く立ちて國都成る若き帝の康德五年

皇紀二千六百年の春

ねがはくば二千六百年の春國の表徴と富士を仰がん

國興り二千六百年にして夷狄の野にも皇軍は入る

橿原のおほみ園にも咲きつらん梅をながめて思ふ遠き世

天地を動かす歌のわれにあれ肇國二千六百の春

世の進むみち眼に見えず魔の笛に眠る群ある今と歎かる

鐵鋼篇

くろがねの歌

昭和十二年の夏、われ昭和製鋼所の長として任に就き、居ること四年、十六年の春に及ぶ。そのあひだ高爐作業、採鑛、製鐵作業などの作業振を詠じ、或は自らの所懐を述べつる歌

所懐

み戦(いくさ)の世なればわれも經國のかたはしと
して鐵(くろがね)つくる

雪しろき西鞍山のあけぼのに思ふはその
岩さきて爲すこと

すめらぎのみ國を護る高爐つく人の集ひ
て幸(さち)も得よとて

煙たちたくみの庭に念ずらくことなかれ
とし夜もすがらわれ

あづかりて護る高爐に一日のことなく過
ぎて心かろかり

わが心みだるるさまに月かかるなびきも
蔽ふ煙の中に

地鎮祭

とこしづめまつりの日なり初秋の雲ながれゆく高き爐のうへ

とこしづめ祭に清きまことをばささげて
禱る高き爐のもと

地鎮祭にうてりにひ鍬のひとくれの土わ
が心ひく

ちはやぶる神のみ國を護らんとくろがね
造る爐の礎石おく

禱りつつ新鍬ふかくうち入れぬ高爐の礎
石こと鎮まれと

掘り据うる礎ふかく鎮まれとしづめまつ
らくにひ鍬をうち

築爐

みいくさの野にあるごとし焚火をし工人
はげみ高爐つくなり

建業の使徒と思はん冬の日に高爐の礎石
つみあぐる群

朔風はおほ空わたり轟ける山の響をまじ
へてぞ鳴る

火入式

千萬の神にまうさんことばなく默して禱
る高き爐のまへ

禱りつつ點さんとして淨き火をささげて
進む高き爐のまへ

神の火を移し點せる聖火もえ新爐に煙い
ましろく立つ

機にもなほかしこみおきて幣帛をささげ
工人わざにしたがふ

點したる聖火とこしへ高き爐に消えずて
護れわが父祖の國

採鑛

劫初より秀でて奇なる山をさきはた今く
だき探るくろがね

天の斧痕おほらかに美はしき岩山くだき
くろがね造る

七月の炎天のもとあへぎつつ登るその山
拓(ひら)くねがひに

くろがねを造らんとして岩くだく山の形
も改まるまで

冬の夜の月のおし照る一輪車きしる作業
のなほつづく山

鐵山の工人いさみ名にかけてこと遂げん
てふ骨を刺す冬

とどろけば山裂け沙の煙たつその爆薬の
力ひと得よ

山くだけ沙の煙ののぼれども侵しがたか
り初秋のそら

トロ車ロオプに曳かれ鞍山の斜面を登る
秋草を分け

運搬車いまわれをのせ闇に入る二千百尺
隧道の奥

カンテラに闇を照らして隧道を歩めば爆
破地壁をゆする

製銑

音つくる熱風たかき爐よりいづ猛獸の野
に吠ゆるが如く

卷き起す風とどろきて鎔銑の炎高爐をほ
どばしり出づ

振る鎚に出銑口のうち破れきらめく銑の
ほどばしる時

燃えたぎりつつ鎔銑は鑄床(ちうしやう)の溝を炎とな
りて流るる

大鍋(ラドル)へたぎりて落つるくろがねの火花た
ばしる高き爐のまへ

夏の陽は煙の上に高く照りくろがね鎔け
て高爐より出づ

錢の爲めのみとなさんやあらがねを造る
みわざにいそしむ苦力

製鋼壓延

火となれる鋼壓延の機を出でて伸びぬ躍
りぬ長蛇の如く

火の中にきたへられつつねりがねの形と
とのふ人に見ること

頼まるる大き力ぞゆるらかに煙突どもの
立つる煙も
火となれる鋼(はがね)の放つ灼光が無限の空の夜
の眸射る

滿蒙の資源を探りて

昭和十四年の夏、滿蒙に於ける鐵鑛石、石炭、鑛油など
の資源調査の爲め、日滿兩國政府より調査委員任命せら
る、余もその一人として一行に加はりける折に詠める

大東港

海の潮みちてひたせり風ひかる一望の葦
あし原の道

船ゆけば河底ふかみ小蟹ども穴に逃げ入
る足掻しつつも

許可屯

夏の陽はたか照り沙の煙たつ道にあへぎ
てくろがね探る

木の陰に設けられたる安平の座に頒たれ
し一杯の飲

東邊道

渾江の水しろくして曉の霧たつ空にわたるかりがね

討匪軍こえつる山にさ霧たち洛江の水しろく流るる

自動車前後警護の兵に護られて搖られつつ越す七道の嶮

この山河つぐることあり涙落つ討匪開拓殉難の跡

火を放ち匪のこぼちたる家くえて立つ溪谷を自動車にして越ゆ

岩角に銃をたてかけ鐵のやま爆破し拓(ひら)く
若き人人

われは過ぐひととせ後の祥月に匪に襲はれし人おほき山

殉難の十八人を供養する白木の墓標ぬらす雨かな

大岩根くだく爆破のとどろけば鐵(くろがね)の鑛(いし)やまに飛び散る

轟けば鐵の岩とぶ爆力も人の力もこの山に知る

雨にぬれ岩根の上に警備兵たつ鐵廠の崖を越す旅

襲はれて斃れし人の前後など友の語るを
その山に聽く

討匪行をしとせぬにあらねども吾れは
尊む山ひらく人

敷島のやまとの國はこと足らふひらけわ
が立つ千尺の山

幾山河こえて來にけり歌を得ん爲めなら
ずしてくろがね探る

二密河（アルミホウ）にわれは來にけり匪に備ふ堡樓の
もとに少女らの立つ

阜新

われ遠く蒙古吐呼魯の丘に立ち石油試錐
の塔を仰げる

石炭の層ほりて千年につきずとし聽きて
國祝せざらめやわれ

遠く來て蒙古に觀るは石炭の山ひらくや
まとの民の力ぞ

國祝がん蒙古吐呼魯の丘の上石油試錐の
塔を仰ぎて

隣する家はた遠し錄音の唄もながるる草
原の上

撫順

吾が住みし家ありし街ほられゆき遂に大
墟の中としなりぬ

土を剝ぎ岩盤碎き湖のかれたる如き底に
石炭採る

掘り捨ててあるにおのづと燃ゆる岩材と
し採れば油ながるる

大岩根さきて碎きて蒸して採る油の泉鐵
管を出づ

古城子に掘りし岩根を材として造れる油
たぎち流るる

かたはしのことなりしかど與りていま成
るを觀る油採る道

大廟に奉らんと石炭の油となるを器にぞ
盛る

頁岩より油採らんと志し遂げずとなして
自刄せし君（以下二首故長谷川技師を悼む）

胸像は大ならねども殘るなり君の造りし
工場の庭

作霖を葬らんとて相したる元帥林に村雨
の降る

作霖よいづこに眠る汝が爲めに造られし
墳墓いまなほ空し

松花江

丘陵が頂にひく地平線たちて流るる大江の水

廣き野に夕立雲のひくく垂れ弦をなさざる虹もこそ立て

起伏なきひろ野に茅花萩ききやう咲きみだるるよ北の七月

茅花さく野よりも廣く水ながれ北より吹ける風の光れり

松花江ゆふべの雲の紅をながせる水に月ほのめきぬ

大江に夕映ながれ紫の雲たちのぼり陽の
沈みゆく

遠く來て佳木斯碼頭に船のつき十年見ぬ
友われを迎ふる

「薄墨」を聽ける旗亭の窓に入る佳木斯の
月と初秋の風

鶴立崗

北の野は七月ながらをみなへし桔梗花さ
き秋風ぞ吹く

匪に備ふ高壓線をめぐらして石炭の層掘
る北の野のはて

匪の爲めに毀たれし家襲はれし人の指し
つぐる北の野

ひらきなば地下百尺にして足らん亞細亞
を興す民のその材

佳木斯

匪襲あり憤ろしも匪の去らで骸なほ野に
ありと聽くにも

兵士たち討匪の行をともにせし遺骨を送
り秋風に立つ

北の野に移りし民の村の屋根あかあかと
見ゆ草の穂の末

ロシヤの境さる十八里移民村ありて少女
の立つがかなしき

「ジオンブル」が亞米利加の野に移りつる
時もさこそと偲ばるる村

殉難の遺骨うつされゆく船に揖しわれ立
つ秋風の中

吉林

月かかり大江ながれ萬木も眠るが如し水に影して

山遠く大江おともなくながれ二更を過ぎし水の樓かな

流るともなき大江に月うかびしじまを破る魚の水おと

哈爾賓

父祖の國追はれて遠し少女たちさもなき
さまに水に遊べど

松花江「ヨット」に越せば風ひかり葦の青
きに水莊たてる

鐵路頌

滿蒙の、鐵道の延長粁一萬を突破せるをことほぎて詠める

鐵(くろがね)の道のびにのび胡の境ひらけ國振(くにぶり)すす
むめでたさ

興(あつか)りしことわれにある鐵の道のさかえ
をほぎせざらめや

露西亞の民くろがねの道きづきしも圖南
の夢の淡く終りぬ

古のスラブの民が築きつる鐵路に見出づ
怪しき夢を

荒れ野にも文華あまねく咲く日きぬ鐵路
一萬粁すでに成り

鐵道の史(ふみ)にものこる滿洲の亡びたる世と
興る國振(くにぶり)

粁哩(キロマイル)一萬火車のはしるときたみ草しげみ
國おこりたり

ひんがしの國よりうけしみ光を頂く火車
の走るめでたさ

おほ稜威おひて延びゆく鐵の道正しきも
のの勝つにかたどれ

バイカル湖ウラルの山もわが「アジャ」行く
日ちかきをなど疑はん（アジャは滿鐵の超高速度列車）

壺蘆島行

學良の築きたりしはその一部いまにして
成る港壺蘆島

十年（とせ）まへ地圖にて見つる壺蘆島にいま來
て思ひ新たなるかな

埠頭長指さす方に學良の築きし別墅屋根　八四
青く立つ

學良の建てたる校舍壁おちてその立つ丘
も半ば崩れぬ

渤海に波しろく立ち素枯れたる丘に光れ
り朔北の雪

風寒し寄せくる波の形して渚にこぼる渤
海の潮

渤海の潮しろく散る斷崖を雪を含める北
の風吹く

北票炭礦を見る

暗のなか炭車斜坑を下るとき華工の眼鋭く光る

炭層をささふる柱岩に立ち炭崩れくる坑道登る

灯影さす安全燈を頭上にし地下の坑夫ら目のみ光れり

炭塵にまみれつれども尊しと揖して過ぎぬ華工の群を

薄暗く安全燈の炭塵を照らす職域人まもり居り

たふとさよ高粱(カオリヤン)の飯(はん)うすき羹(たん)職域護る人

の食ふもの

日本の工夫も居りてその家の上には襁褓(つゝむ)

翻る見ゆ

父祖の國遠く追はれし民もありオロシヤ

娘の日本語を聽く

景觀篇

折に觸れ時につれて滿洲の
春夏秋冬の景觀を詠める

春

初春や鳳眼菩提樹の數珠をまさぐる窓に
淡雪の散る

少女(をとめ)あり長白山の雪とけて流るる水の清
きなぎさに

おほらかに楊の芽ども青みそめひろ野に
しろしひとすぢの水

春もなほ蒙古風たち滿洲の千里の草の霾
に煙れり

霾ふれば草原けぶりをちかたの木立もあ
はれ姿なきかな

梅さきて娘娘廟の祭きぬ村少女たち赤を
裝ふ

鞍山のこさめの土にしみいりて梅ちる夕
わが愁わく

鞍山のやまむらさきに若葉して楊も雨に
ひかる朝かな

霧の降る野に使命を見たがやして倦まざ
る人は讃ふべきかな

紅梅のたてる畑を皺ふかき老たがやせば
風に花ちる

命ある限り荒れ野を耕やして築きし村も
まだ恵まれず

一生を捧げあれ野を耕やせる人すむ里に
匪の荒ぶとは

おほ空にかぐろく立てる千山の麓に煙る
柳そこばく

紫にけぶる木立の中にしてしろく煙のた
ちなびく家

祭の灯わか葉の蔭に揺ぐなり荒きに過ぐる滿洲の雨

消えんとす草のひろ野に夕映し光の海の現れしかと

春雨の降る夜を支那の馬車ゆきぬ瘠せたる馬もややなまめかし

滿人を載せて街ゆくエゾオシカ滅びし國を憶へと如く（エゾオシカはロシヤ語の馬車の意）

黄なる花みどりの丘に咲きみだれ白楊（ポプラ）のわか葉かぜに光る日

萠えそめし樫（ヒヨ）柳（ヤナギ）の枝にたつ風が渚につくるさざ波にして

ほのかにももゆる楊の風たちぬおち葉たくをば山に觀るごと

胡藤の木立ひろ野のをちかたに紫をひく春のたそがれ

はろばろと霞ひく野のたひらけく天を境す紅のひとすぢ

とけそめし氷ながれて白樺のほづえ青みぬ渾河のほとり

喪の色になほ冬がれし萬木にまじる楊の若き裝ひ

巣を護り鵲とまる白楊の上枝にそへりかろき春風

畑のうね天につづきて擴ごれり春さむけ
れどすでに耕す

春の來て新たにもゆる若草を千年ながめ
て白塔の立つ

滑らかに溫泉ながれて若葉てり春の光の
漂ふところ（以下湯崗子溫泉にて）

はらはらと春雨こぼれはつ聲の蛙もきこ
え人の戀しき

青空を翼ひろげておほ鳥の飛ぶごとわれ
も行はん世に

爆音をそらにのこして機影ゆく梅さきそ
めしひろき野の上

流れいる溫泉(いでゆ)に解くる氷さへ春は何をかささやくものを

清らけく溫泉にひたりそれといふ形もなさぬ愁わく朝

こころざし遂げんとしつることの成り疲れし身をば湯の宿におく（以上）

素枯(すが)れ立つ雜草いまや耘(くさぎ)られ黃土の匂ひ春を知らしむ

耕せる土くろぐろと匂へるに烏むれ來て蟲ひろひ食(は)む

丸木橋わか葉も人もあやめさへさかしまに咲く春の水かな（以下五龍背にて）

うつくしき楓の若葉あつまりてそよげる

山に閑古鳥なく

五龍山五月の霞たちなびき森はわか葉し

閑古鳥啼く

夏

しろき花さく胡藤に鵲の鳴く鞍山のまち

のはつ夏

青き野の上にしぶきて雨いたり忽ち荒く

うつ汽車の窓

山峡のこみちに仰ぐ鵲が岩うつり飛ぶしろき翼(はね)して

牧童と鞭に追はるる牛わしる黄なる花さく野ばらの上を

戰に敗れし露西亞の民の墳(つか)塋古り滿洲の建國は成る

水かれし河原よ支那の少女たち柳の蔭によりて遊べり

ひと時に見がたきをわれここに見る月あはきそら暉(ひ)ののぼる天(そら)

夕あかりのこれる空に雲うすく鬱(うこん)金になびき月のほのめく

胡藤の花しろく散りつばめ飛ぶ夕につき
ずわくおもひかな

投げし網そらにひろがる形して烏むれ飛
ぶ夕映の天

暁のそらに殘れる星と似てホテルの窓に
飛ぶ柳絮かな

窓にさす鞍山のつき背になして蚊帳をく
ぐればねやに影おつ

雨ののちつき青玉の色をおびさやかなる
かな黄昏の丘

月いでぬ蟲の音しげき野の上をたかく唄
ひて満人はゆく

栗の木の影ふみている千山の徑に聽ける
轡蟲かな（以下千山に登りて）

なにの木のものともなしにしろく散る花
ふみ登る千山の道

梨の花こぼれ落つるを階にふみ高きに仰
ぐ無量觀かな

畫顔の花しほれよる碑の文字抹殺れたつ
山の寺かな（碑文中の張作霖の名など墨にて抹殺されしを見て）

頰白の鳴くを聽きつつ梨の花こぼるる山
に觀るみ寺かな

とどろける山の青葉の風を聽きわがゆく
ところ「一歩登天」

紫の花さく山につばめとび松風の鳴る無量觀かな

忘れえぬ人を深山に夢みたる花とおぼゆる紫丁香かな

千山に築ける石の階たかし極まるところ

「一歩登天」

たかき巖ひとの登るを觀てわれの心をどらずあやしけれども

無量觀ももとせ山は拓(ひら)かれず匪を討たんため道のいま成る

ひろき野のたひら遙ろけし夏のそら高し遼原臺に望めば

秋

滿洲の秋のはじめの燕がわが軒ちかくと
ぶタかな

石刻む音をまじへて胡藤の梢に秋のはつ
風ぞ吹く

天地に秋の譜をいまもたらして風かろく
立つ白楊の葉に

大車にて木立をこぼれ落つる日の流るる
水をわたる秋かな

胡藤の影もろともに沙のみち月にふみゆ
く秋の人われ

滿洲のひろ野の秋の夕映し赤き蜻蛉のそらを飛ぶころ

莖あかき草もまじへし穗芒のまばゆきまでに輝ける朝

水青き池のなぎさにうら枯れし樫柳の煙る秋の雨かな

うらさびし澄むおほぞらに千山の容ただしく浮ぶたそがれ

秋の夜はまだ野に明けず峰峰の裾をめぐりて霧しろくたつ

月さえて露にぬれたる白楊の葉畫にくらべて清さのまさる

草の葉もそよがずものの音たえて月のみ
高くおほぞらをゆく

秋の野をぬらして過ぎしむら雨ののちに
いたりて山色しぐる

湯の宿にきていにしへを語る夜は月も光
りぬ草の露さへ

蟲の音もかそけし月に草ひかり二更を過
ぎし水の亭かな

枝ながく垂れてうつせる白楊のもみぢも
水に散りそめにけり

雲遠くながれてしばし山を見ず汽車にて
過ぐるひろき野のはし

白楊のはらはらと散り夕映がつくる光の海に舞ふかな

秋の夜の趣そへぬ望の月燒け殘りたる軒にかかれば

望の月ネオンの街の上にゐて遠かる人のしのばれぞする

秋の夜の澄みわたりたるおほぞらの心にしばし望の月見る

望の月雨に憶ふは師とともに見し夕より經ぬるとし月

はらはらと黃なる胡藤水にちり落葉も作る秋のさざ波

野のひろし高粱(カオリヤン)の畑刈りさられ茅花にし
ろく秋風わたる

静かなる野に月さえて雲もなくただ吾が
影を草のおくのみ

首山堡を仰ぎ見るなり友の背(せ)の討死せし
といふ邊(ほとり)より

石積みて邸(やしき)となせる一隅の天(そら)に臙脂をひ
ろげたる槍(はぜ)

冬

畫の月野の啓示めきはろばろと草枯れたるに淡くかかれり

雪の野の一木の上に鵲はなにを思ふやこくび傾け

白樺の木の根に冬の清水わき牛あゆみよる雪をふみつつ

鞍山の月ののこりて霜の花つけし木立のしろきあけぼの

月きよし天上の樂かなでつつ雪のひろ野を木枯はしる

天地に秋の盡くれば木の葉おち窓にし迫る千山の峰

朝の日がいま離れたる千山にしばし止まるあかつきの雲

初冬の空をいただき千山の容(かたち)を正し立ち競ふ峰

そこなはず虛空の青を千山の立ちて遮ることの外には

滿洲の山ふゆ枯れてはろかなり雲しろく散る青空のもと

朝の陽(ひ)のさしいる窓に鳩の來て羽搏く影の落つるわが肩

雪しろく千山かすみ青空の極りなきに心
を放つ

厚氷とけて流るる鴨緑江の水の青かり船
うかびつつ

颯颯と枯草の山ふきくだる風に消さるる
磯の浪音（以下二首星ヶ浦にて）

世を離れ磯うつ浪の平調もしばし孤獨の
境に樂しむ

沙煙たつ野の隅に黑き塔車窓に見えぬ日
の落つる頃

枯野ゆく汽車枯野ゆく青きもの遂に見ず
して日の落ちんとす

土の家繞らす土塀つち落ちて枯れ野に沈む日の前に立つ

山の朝木立もともに逆にうつれる池の靜かなる水

紫をうすく木立に殘しつつ赤き夕日の草原に落つ

山の雪まだらに殘りその上に曉の雲あかく輝く

遙かなる赭土ばたけ冬枯れて畦の窪みに雪きえ殘る

素枯れたるままにのこれる葦の葉に氷を渡り風寒く吹く

羈旅篇

赴任の途上

昭和十二年の夏吾れ鞍山なる昭和製鋼所に赴任の爲め東京を發し滿洲に渡りける折に詠める

野の茅花さきをはるころなりはひのわれ
改まる旅にゐしかな

石原の遙けくつづき水鳥のかげ天龍の川
になきかな

わが船のマストに月のかかるとき煙の影
も清き海原

薔薇の花くづるるよりも身にしみぬ紅き
日のいる黄海の波

わが胸にひしひし迫る友の歌あり手にす
るは一行の文字

二十年を過せしひろ野けふ來ればそよぐ
草にもしたしさのわく

人の世のなかばをここに過しつるわが思
ひでの少なからんや

ひろき野に立ちて心の躍るなり雲たかく
飛ぶおほ空のもと

石くだき鐵(くろがね)つくるその力その熱人に見ん
世界これ

ねりがねの畑に夜の空うすく輝くかなた
月あはく落つ

雲に飛ぶ

昭和十二年の秋東京大連の間を飛行機にて往來せる折に詠める

雲きれて眞白き富士の顯れぬ吾がダグラス機天翔(あまか)くる時

乘れる機の翼の上にましろなる富士を見
つつも超ゆる足柄

風に乘り雲を飛ぶ吾が機の下に山冬さび
て白き函嶺路

亂れ飛ぶ雲をつんざき吾が機ゆく駿河灣
内千尺の上

遙かにも機より望めば海青し極まるとこ
ろ壹岐の島たつ

飛行機の揚るにつれて擴ごれるおほわだ
つみに見ゆる島ども

眼界の外としたりし島も見ゆ吾が機の高
度いまましたらん

雲なかば對馬を蔽ひかたはしに白波あが
る下界を見れば

黒き雲くぐり眞白き雲を蹈み吾が機ダグ
ラスおほ空をゆく

雪の野を橇して走る趣に雲の上ゆくわが
ダグラス機

巻きのぼるましろき雲の層も見てその上
を翔く吾がダグラス機

しろき雲翼に切りてダグラス機照る日に
滿ちし大空をゆく

ダグラス機たかく上りて海を超ゆ翼にし
ろき雲切りながら

はかなかるまさに命ぞプロペラに身をば
託して海越ゆる時

きずつきて油洩るると機をば告ぐ海の上
なる雲の中にて

墜落の刹那を思ふきずつきしわが機のい
たく傾ける時

乗れる機の不時著陸を海にせば五分あら
じと人もこそ云へ

一瞬のながかりけりなきずつきし機にて
空ゆく五十六分

嶋影を見るうれしさよ海の上きずつきし
機の内にわが居て

危きにあれど自ら思ふらくわが命數はこ
こにしつきじ

きずつきし機に乘りきのふ戻りつるコウ
スをけふは安らけく飛ぶ

雪の野のまだらになれる趣の雲の切れ目
が見する水陸

機は高く揚りぬ雲は亂れ飛ぶ山を地球の
襞と見るまで

きれぎれに白き雲飛ぶ朝鮮の山冬ざれぬ
乘れる機のした

天の上機して渉れば雲もなくわれは瞳を
虛空に放つ

大空と海原の色わきがたし流るる雲の界
すれども

紺青の海を限れる圓周の紅に燃え夕陽(ゆふひ)を
ちゆく

頂は紫紺に霞みその裾はましろき雲につ
つまれし山

機して踏む雲の下なる遠東の紫紺の峰の
頂の端(はし)

飛行機は危し支那の機も飛ぶと妻の文き
ぬ機に飛ばん朝

天地(あめつち)を人の世ならぬ繪となして吾が機ダ
グラス雲わくる時

人の世と距たれること九千尺機にて思へば常と異なる

天上の星を大地に散すごとしろく光れる海原の波

須磨明石機にて超ゆれば白帆見ゆ釣に垂れたる浮標（うき）といふべく

眞白なる富士を翼に切りてゆく鵬（おほとり）のごとわが機飛ぶとき

富士しろく伊豆は紫紺の雲にいる鳳凰となり吾が機飛ぶ時

機の下に觀る海青し遙（はる）かなる水平線は紅（あか）き夕映

冬枯の山を濃青にとりまける海あまねく
も白波のたつ

雲の上機より仰げりおほ空の高きよりな
ほたかきもの觀る

北信遊草

霧のゆく青葉の嶺を落葉松のほづえに望
む信濃路に來ぬ（以下輕井澤に遊びて）

谿の水さやかに流れから松の林にしろし
六月の霧

霧ふかき信濃の谿にしろき蝶とぶ形して
冬青の花さく

霧ふかき谿に水鳴りから松の雫を夜半の
軒にきく家

霧あらく雨のまじりて降りくれば山もは
かなししらけつつ消ゆ

山荘のテラスに明き灯をおけば艶めきい
づる夜の木立かな

霧ながれ晴れゆくかたに栗の葉のかろげ
にそよぐ山の朝かな

躑躅さく青葉の山に霧ながれ呼子鳥なく
北信濃かな

つつじ咲く山路に立てば鶯のこゆる淺閑
の鎔岩の原

淺閑やま瑠璃のみ空にあらはるるしろが
ねの火と鎔岩の肌

霧ながれはてなく躑躅さきみだる淺閑平
の初夏にして

鎔岩のみだれ立つ野に隣して躑躅花さく
淺閑の平(たひら)

をちかたの色もさやかに見えわかず躑躅
さく野のめざましきかな

毒空木(どくうつぎ)花しろくさき信濃路に霧のかかる
も淋しかりけれ

若葉する雜木林につつじ咲き陽のこぼれ
ちる山の明るし

緩やかに淺閑平は斜なし千萬株さく躑躅
みだれて

大人すでになきのち山の莊はあれ訪ぬる
道につつじ花さく（以下故山本条太郎翁の山莊を訪れて）

この山莊に故高橋是清翁曾て「雷も氷室をのぞく暑さかな」
なる句を遺さられしを思ひ出して

この莊に氷室の句をばのこしたる人も聽
きつる大人もまささざる

もろともに眺めし山の青葉して小鳥し鳴
けど大人の聲なし

伊豆遊草

雲ながれ富士あらはれてうれしけれ見がたしとせし人に遇ふごと（以下泰、熱海にて）

山さむし梅まだ咲かず櫻さく天の遠算は許しぬべかり

涅槃（ねはん）などいはるることも思ひみぬ陽（ひ）の落つるとき海にむかひて

うす色に空のかすみて靄（もや）たてば波も夢みん大島の春

老いらくの母の見がたき大島を霞のうちにわれの指さす

愛鷹のちかく立てども光なし雲を破りて
富士いでぬれば

もろともに日加根の山に見し富士は立つ
といへどもいまなし大人は

わが心にもあるごとく夕闇が消しつる海
にのこる灯火

海の街ほかげ散らせば錦をば汀に織れる
しら波としぬ

灯火のはかなく海につらなりて山を消し
たる伊豆の宵かな

海くれて熱海の磯の波しろし遠く網代に
灯の見ゆるころ

高き階母の手をとり登るとき梅さと香り
山の鳥啼く（以下早春、修禪寺にて）

湯につかれまどろみませる母もあり燭に
筆とる伊豆の山莊

人の世の毀譽をば知らず山かげに朝霧ひ
かり蘭の花さく

わかれつる時の眸に見しほどの露ののこ
れる蘭の花かな

湯にひたりしばし離れぬ吾れもまたくろ
がねつくりいだす業より

應召の爲め休院と書く家の門（かど）にたちたる
梅の花かな

蜜蜂の來て飛ぶ庭に梅のさき折から竹に
かろき風たつ

しら波に鷗たはむれ飛ぶ磯に咲きたる伊
豆の桃の花かな（以下春、川奈にて）

雲雀なき枯生の芝を風わたる川奈岬にの
ぞむ大島

桃の花さき山かすみ橙の黄なるにくるる
伊豆の村かな

初島をのみ眼における東海にしばししして
知る舟のうかぶを（以下秋、熱海にて）

若き人いつしか優に老ゆるとも見ゆる夕
の海の色かな

待つ人を心に描く山の湯に怪しく張らる
ささがにの絲

思ひ出のおのれにありて無花果はしのば
しむなりたらちねの母

須雲川のほとり

梅の花伊豆にわが觀て函根路へいる日に
仰ぐ二子嶺のゆき

ガラス戸を透して灯(ほ)影(かげ)池に散り小雨そぼ
降る須雲莊かな

胸いたし雲の蔽へば足柄の山光ある未來
なきかと

たきこめし香の薫ずる室にいり師のおん
前に賜ふ食の座

湯坂山ふもとの楓わかくもえ木立珊瑚の
枝をちりばむ

昏迷の世を灯(ともしび)の照すごと黄の香(かぐ)實(み)なほの
こる南國

苔生ふる徑(みち)に二月の雨そぼちぬ笹の葉しろ
き須雲莊かな

笹原の葉のけしきばみ木立みな芽の用意
するよき二月かな

曉の夢よりさめて水聲を肩の寒けき闇に
聽くかな

部屋隣る赳武の聲に奪はれし夢の中なる
甘き思ひで

苔溪のあらで淋しき歌の座も赳武のあり
て諧調の湧く

木の香なほ新らしく立つ山莊に歌の夜の
ふけ春の雨ふる

まばらなる竹に煙れる春雨へ心をのこし
出づる山莊

杖頭抄

甲斐の山しぐれて遠し桂川きりぎしの上
うす紅葉する（以下桂川にて）

山荘の小舟つながれ水しろく秋のさびし
き桂川かな

冬の日が寒くさすなり慶長の文字きざま
れし城の礎石に（以下名古屋にて）

もの移るみ世おもはしむ名古屋城ほりに
水かれ鹿遊びたり

よもの山まだらに雪の消えのこり長良の
川は水ましにけり

若葉する天城のみちに山櫻すこしぬらして春の雨ふる（以下伊豆の山にて）

草もゆる伊豆の山また山を越え高きに望む駿河の海を

待つことのなかば成りたる趣に若葉の光る伊豆の三月

湯の宿にむかへし春のことはじめたらちねに文かきて壽ぐ（熱海にて）

やま風のいと冷やかにたつ夏の雜木林に朝霧のちる（以下箱根にて）

自動車の灯に照されて足柄の山路に光る月見草かな